

大学の教職課程における「金融教育」の指導法

金融教育の現場レポート

「金融教育」は、社会の中で生きる力を育むことを目的として行われる教育です。

このコーナーでは、金融教育の授業がどのように進められているか、

教育現場に立つ先生や、授業を受ける生徒の姿をレポートします。

今回は、帝京大学教職大学院の小関禮子准教授が、

大学の学部で小学校教諭を目指す学んでいる学生に実践している

金融教育の指導法に関する取り組みについてご紹介します。

小学校教諭を目指す学生への金融教育

小関先生は平成21年度より、帝京大学の教職大学院と学部でもいくつかの授業を担当するなど、小学校教諭を目指す学生の指導を行っています。

「小学校家庭科の指導法」という講義においては、学習指導要領の改訂により、新たに小学校家庭科で「消費生活と環境」について学ぶことが盛り込まれたことから、改めて金融教育の視点に立った指導を工夫させたいと考えました。小関先生は、「小学生に金融教育を行うとしたら、どのような授業を展開するか」をテーマに実践的な「教材づくりと指導法」を考えさせる授業を行っています。

学習の狙いは「1…物や金銭の使い方と買い物を指導する」「2…環境に配慮した生活の工夫について指導す



る」ことですが、「学習指導要領にあるから指導する」というだけでなく、学生が、「子どもたちに消費者教育、金融教育を行うことの必要性」と指

導のポイントに気づき、授業を組み立てられるようになることが目的です。

「なぜなら、金融教育は『これが正解』というハウツーを指導するもので

東京都
帝京大学教職大学院
小関禮子准教授

■学生から見た「子どもたちの消費生活の問題点」(課題1)
 (対象：家族(弟妹)、ボランティア先・アルバイト先の塾やファミリーレストランで見た子ども、近所の身近な子ども)

小遣いのもらいすぎでは？	モッタイナイという感覚がないのでは？
・言えば貰えると思っている ⇒ ネットショッピングにもつながっている	・品質より見た目のよさで買う
・ゲームセンター	・おしゃれなものや新しく出たものがいいと思っている
・カードゲーム(子ども同士の売買目撃)	・ブランド志向
・コンビニでの買い食い(遊び)	・金銭感覚がズレているのでは？
・子どもだけで外食	・高額な買い物や遊び
・考えながらお金を使うことが少ない	・根源は、お金の大切さがわかっていない
・何が無駄遣いか、わかっていない	・親の、子どもへのしつけができていない
・物の所有の有無による仲間はざし	・お金を渡しておけばいいと思っている親の問題
・友だちが持っているとすぐに欲しがる	・携帯やネット依存
・子どもが欲しがるようにできている	・オンラインゲームの遊び
・物を買っても簡単に飽きる	・ネットショッピング(クリックすれば簡単に買える)
・簡単に捨てる	

■学生自身の自分の消費生活に関する問題点

・自分も、情報教育や資源やお金に関する教育を受けてこなかった。
・ケチケチ苦しく生活して、節約するかと思うと、ドカッと浪費してしまい、後悔ばかりしている
・外食が多い、勉強も喫茶店であることが多い(つい)
・ほしい洋服をガマンできない
・衝動買いが多い
・店先で見て欲しくなると、後先考えずに買ってしまふ
・通学の電車の中は、ずっと長い時間、携帯を見続けている(ネットに繋ぐのでお金がかかる)
・20歳を過ぎ、ローンを組んで買い物できるようになったが、あまり考えずに買い物しそうなので気をつけたい
・ネットオークション、ネットショッピングの買い物が多すぎる
・深く考えずに買っている
・自分ではないが、友だちの中には、クレジットで支払える以上に買い過ぎで困っている人がいる

小学生と比べて知る
 自己の消費生活

はありませぬ。重要なのは、子どもたちの思考力、判断力、表現力を育て、主体的に判断し行動する消費者を育てるということ。それを狙いとして、どのように教材を組み立てるかを、学生に考えさせなければなりません」と、小関先生は話します。

授業で学生たちはまず、身近な小学生(家族、塾やファミリーレストランなどのアルバイト先で出会う子どもたちなど)を対象に「小学生の消費生活の実態把握・分析」を行います。この時点では、小学生に対して、金銭感覚や浪費を指摘する厳しい批判的な意見が多いのが特徴です。次に大学生である自分たちの日常を省みると、その無計画性、無駄の多さ、堪え性

のなさなどに、「自分も小学生と大して変わらない」「無知で頼りない消費者」であることを実感していきます。さらに、日常生活にありがちなことをコマ絵にしたワークシートに記入することによって、学生自身が自分の消費生活を深く見詰め、「自分たちはきちんとした金融教育を受けていなかった」と感じ「金融教育は子どもだからこそ行う必要がある」と

いう認識を確かに行うことができず。つまり、小関先生の「狙い通り」の動機付けを学生にもたらしることができるのです。

その後、学生たちは2人1組で課題の深化と問題点の考察を行い、4人1組で取りあげるテーマを決めて、紙芝居・劇・ロールプレイングなどの具体的な教材を使った指導案を考え、最後に模擬授業によるプレゼンテーションを行います。例えば、昨今の携帯電話の普及に伴い頻発する課金問題について、子どもたちがソーシャルゲームで遊ぶうちにどんどんゲーム上のアイテムを購入してしまい、多額の請求が届いてしまう様子を寸劇で見せる授業。ほかにも、衝動買いについてロールプレイで考えさせたりするなど、さまざまな授業案が発表されてきました。

そして、これらの過程で徐々に学生たちの意識も変化します。水を出っぱなしなどの「ばなしをしない」、大安売りにのせられて「衝動買いをしない」などを、意識して心がけるようになった学生が増えたといいます。消費者トランプなどにも目を向け始めました。

39年間の現場実践をとおして

小関先生は現職に就くまで39年間

■視点を広げ、次の活動につなげるためのワークシートの活用と各コマ絵に学生が付けたタイトルの例（課題1に対する学生の答え）



- ◆パナシーはだめよ(付けっぱなし)
- ◆使うとき、使う分だけ
- ◆あなたもやってる無駄づかい



- ◆捨てればゴミ。資源を大切に
- ◆そのごみ捨てる？リサイクルする？
- ◆ちょっと待て。まだ使えるか、見直そう



- ◆大安売りにつられるな
- ◆それってほんとに必要な物？
- ◆安いからって買っちゃうの？
- ◆いる物だけお買い物



- ◆使い捨ても使いよう
- ◆頼りすぎるな使い捨て
- ◆使ったらポイ。それでいいの？
- ◆リユースできる物を選ぼう

※上記のタイトルは学生が絵からそれぞれイメージし考えたものです。

は小学校の教員として勤め、最後の9年間は校長として「消費者教育」を中心とした金融教育に力を注いでいました。ただ、そういう金融教育の芽は、昭和40年代から始まっており、校長になる以前から「消費者教育」をテーマに、多数の家庭科や道徳教育を実践してきました。 「最初のころは、社会で合成着色料の問題が叫ばれるようになり、『合成着色料を使った偽物ジュース』の授業をしていましたね。消費者として何をどう選ぶか、人や物に流されない、

■学生が考えた授業例

「見えないお金の問題（課金問題）」（劇）

オンラインゲームで次々に有料のものにお金をつぎ込み、親から高額な請求書が届いたことを知らされ、ひどく叱られる子ども ⇒ どうすればこのようなことにならずにすむか、考えてみよう。

「あなたならどうする？」（ロールプレイ）

セット売りや限定などの大安売りにつられて買い物しそうな兄と妹の問題。ある文房具店の店主は、在庫セールで、セットにして売ろうとするが…こんな経験はありますか？



だまされないうために必要な教育だと考えていました」と小関先生は言います。また、「当時から、落とし物が多い、ものを大切にしない子がいるというのは気になるテーマでした。貯金通帳（お金）が宝物だという子も目立ってきて。お金や物に対する考え方はとても大切ですが、家庭によって価値観も違います。『こうしなさい』や『無駄遣いはダメ』ではなく、『本当に必要なものなのか』を子どもたちが主体的に判断する力を個々に養っていき、教育が大切なのだとは強く感じていますね」。

特に小学生の頃は周囲の目を気にして、「みんなが持っているから」「仲間はずれになりたくない」という意識が強く、お金や物で友だちの気持ちや物を繋ぐとする子どもがいることも問題視されています。小関先生は「消費者教育は人間関係と切り離して考えられない

問題。学生たちはそうしたことも、この授業を通じて自らを振り返って思い出し、指導のポイントとして意識できるようにする必要があります」と言います。

金融教育とこれからの課題

小関先生は「金融教育とは人間教育である」と考えています。子どものお金に対する価値観は、保護者の価値観がそのまま反映されることがほとんどです。ただ、「子どもたちが変われば、保護者も変わります」と小関先生は自信を持って答えます。

「保護者が子どもの目に見える変化を目にすることや、保護者にも子どもたちと一緒に考えてもらう取り組みは非常に効果があります。『夜遅く居酒屋で子ども連れを見かける』『ブランド物、化粧品、プチ整形、ネットショッピングなど大人と同じ消費生活が浸透しつつある』といった昨今の状況も、保護者に『お金に対する考え方は生き方に関わる』という理解を促していけば、大人にも分かってもらえるものです」と話します。「校長として赴任した小学校の付近

に、地域から隔離されるように存在する知的障がい者の授産施設がありました。あるとき、子どもたちや保護者たちが、その施設にある種の偏見を持っていることを知り、私はあえて、その施設と勤労体験やボランティア体験などで交流を持つことにしました。子どもたちは黙々とものづくりに勤しむ施設の人たちを尊敬して、あつという間に互いに親密な関係が深まりました。そして、私が去った後も、交流が続く学校の伝統行事になっています。もちろん、周囲の偏見も次第に消えていきました。子どもたちは、働くことの厳しさ、尊さを学びました。そしてもう1つ、思いがけない大きな変化は、施設の人たちが労働の対価としてもらっている賃金の額を知り、子どもたちが自分たちのお小遣いに疑問を持ち始めたことです。保護者にお小遣いを返す子が何人も現れ、私も驚きました」と小関先生は振り返ります。

金融教育とは最終的には生き方教育になる。今、教育者になろうとする学生たちを育てている小関先生は、こうした自身の活きた経験を背景に、後進の育成に取り組んでいます。

大学の教職課程における「金融教育」の指導法

東京都
帝京大学教職大学院 小関禮子准教授